

ろう乳幼児を巡る現状と課題

- 日本耳鼻咽喉科学会・耳鼻科医師としての取り組み -



なかがわ たかし

中川尚志



一般社団法人 日本耳鼻咽喉科学会
The Oto-Rhino-Laryngological Society of Japan

一般社団法人 日本耳鼻咽喉科学会 理事

九州大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科学分野 教授

一般社団法人 日本耳鼻咽喉科学会 の立ち位置



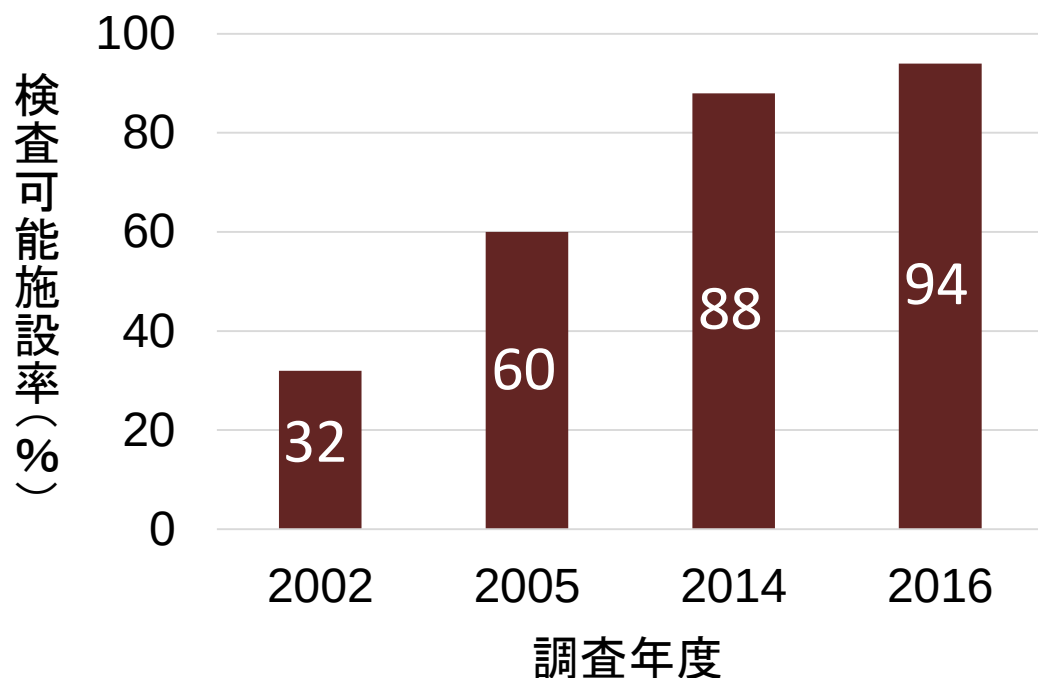
疾患による難聴の治療や対応、騒音性難聴の予防などの啓発を目的としたホームページを学会で作成。
同時に、ろう社会との共生を目指し、手話言語法への応援を明記しました。

なお、一般社団法人日本耳鼻咽喉科学会は
手話言語法の制定を応援します。

<http://www.jibika.or.jp/owned/hwel/>より

早期診断・早期療育で聞こえないこどもたちの 豊かな言語力を目指す

新生児聴覚スクリーニング検査可能施設率（日本産婦人科医会HPより）

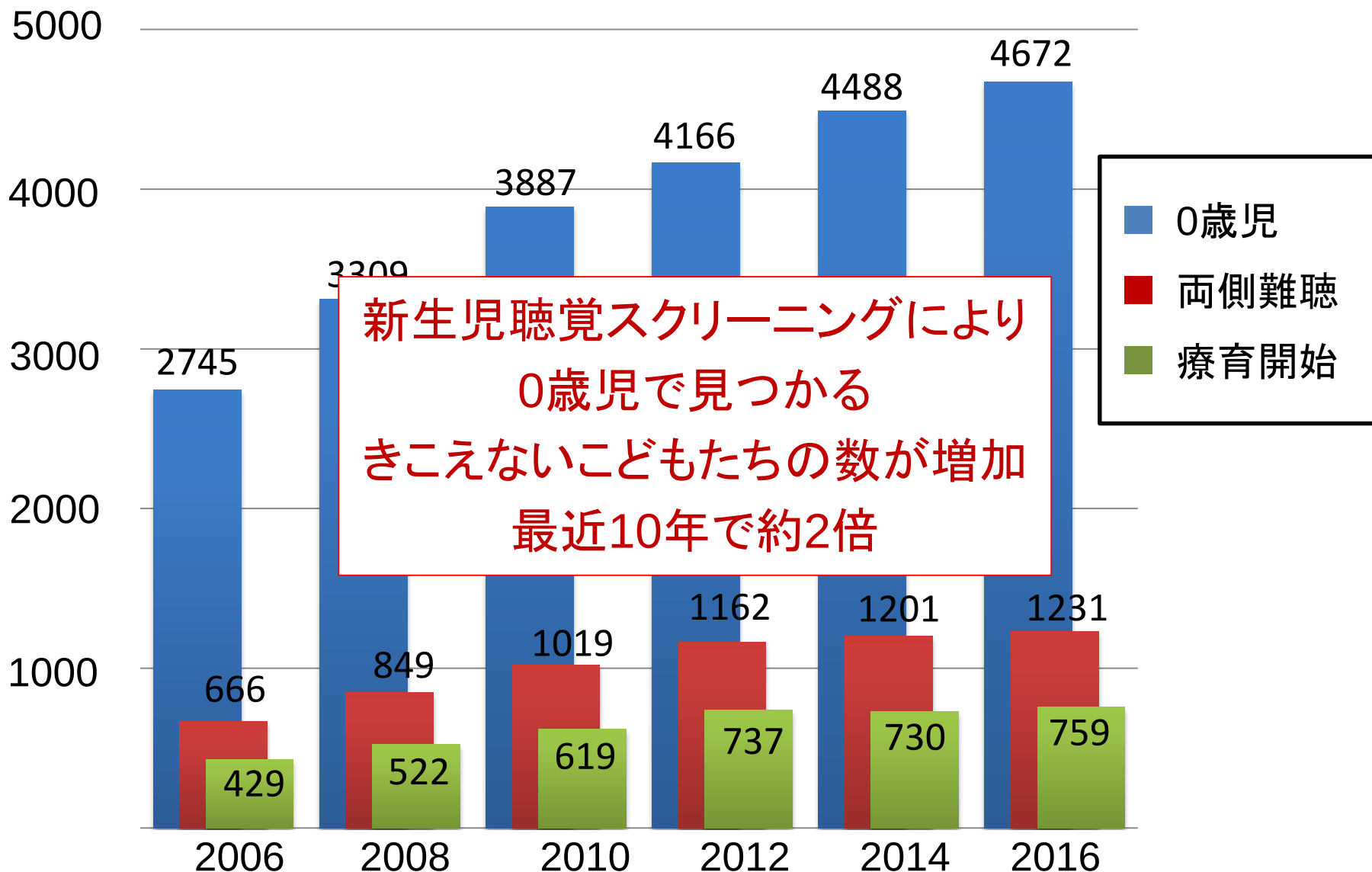


94%の施設で実施可能
検査実施率は88%
検査可能施設が増加し、
社会に定着

2017年の産婦人科の診療ガイドラインで
新生児聴覚スクリーニングの推奨度が
「行うよう勧められる」に上がった

新生児聴覚スクリーニング後の精密聴力検査機関実態調査

調査年度別の初診0歳児数/両側難聴/療育開始児数

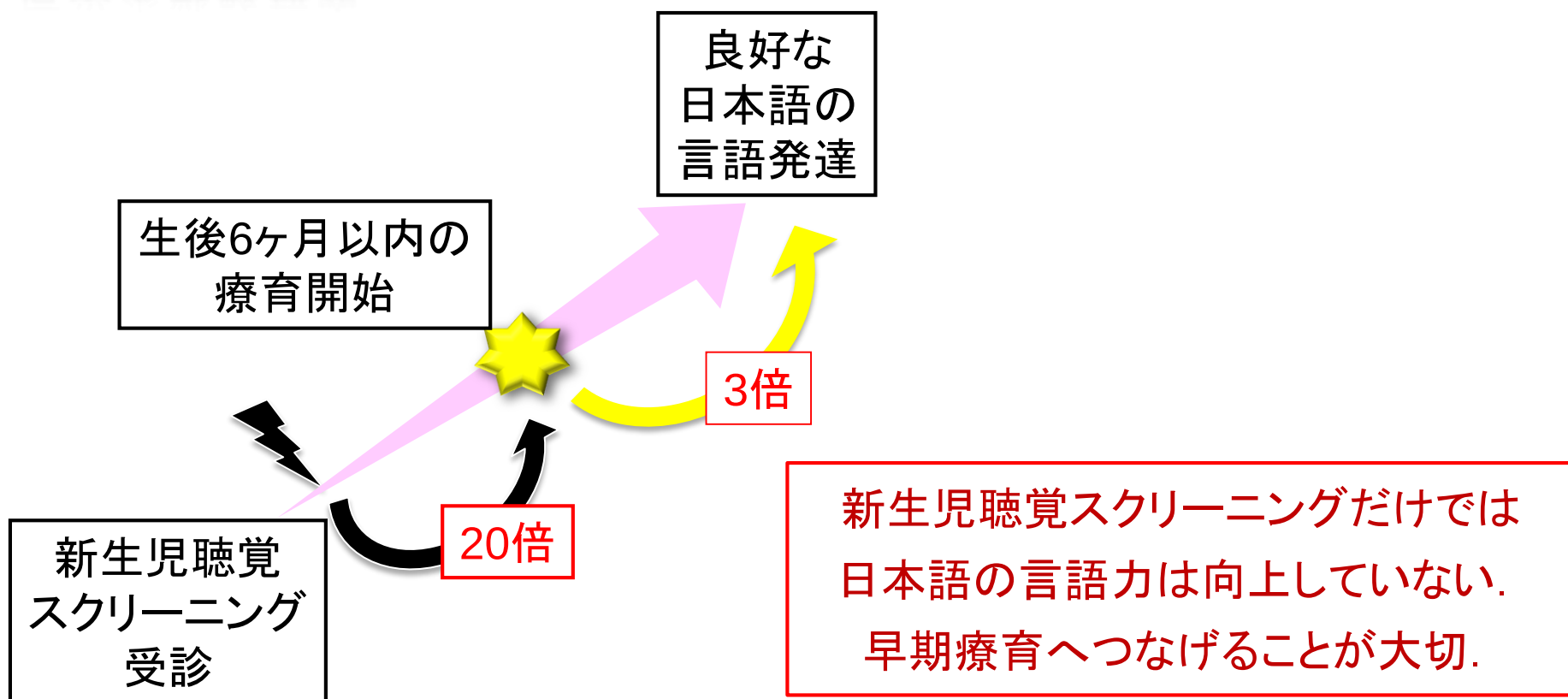


早期診断・早期療育は良好な日本語の言語発達を育む



厚労省戦略研究
言語聴覚研究

両耳とも70dB以上の難聴があるこどもたちを対象に
日本語の言語発達を評価した大規模研究を
岡山大(当時)の福島邦博先生が中心に全国多施設で行った。
推定では対象児童全体の4人に1人が参加。



赤ちゃんが口にする喃語の時期や
言語の力を獲得する上限の年齢とされる
臨界期があることを含めて、
音声言語の獲得過程と手話言語の獲得過程とは、
そう変わらない（武居 2005）



早期診断・早期療育は新生児に二つの言語を習得する
可能性を提供する（大杉 2012）

聴こえないこどもたちの現在の進路



新生児・乳児・幼児

新生児聴覚スクリーニングや健診で要精査，養育者の気付き
耳鼻咽喉科精密検査機関を受診，難聴と診断



療育施設
聴覚特別支援学校

通常学級

通常学級＋通級指導
難聴学級

聴覚特別支援学校
(ろう学校)

音声言語主体

音声言語＋手話言語
(割合は個人によって様々)

手話言語主体

日本耳鼻咽喉科学会の共生を目指す活動の一部

1. 新生児聴覚スクリーニングマニュアル 2016

「p42 きこえる家族・難聴家族・ろう家族」に分けて解説

2. 小児人工内耳適応基準改定 2014

「手話などの音声言語以外のコミュニケーション手段についても説明されるべきである」

インクルージョン
-“共生”の社会を作る-



ろう乳幼児とろう児を持つ親への 支援の在り方について



なかがわ たかし

中川尚志



一般社団法人 日本耳鼻咽喉科学会
The Oto-Rhino-Laryngological Society of Japan

一般社団法人 日本耳鼻咽喉科学会 理事

九州大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科学分野 教授

聴こえないこどもたちの現在の進路



新生児・乳児・幼児

新生児聴覚スクリーニングや健診で要精査，養育者の気付き
耳鼻咽喉科精密検査機関を受診，難聴と診断



療育施設
聴覚特別支援学校

通常学級

通常学級＋通級指導
難聴学級

聴覚特別支援学校
(ろう学校)

音声言語主体

音声言語＋手話言語
(割合は個人によって様々)

手話言語主体

聴こえないこどもたちの現在の進路



全日本ろうあ連盟の人工内耳に対する見解

掲載日：2016/12/01 分類：事務局からのお知らせ・提言

昨今、人工内耳の技術進歩が進み、人工内耳装用児・者は増加しています。それに伴いさまざまな課題が出ています。特にろう教育現場では人工内耳装用児の増加のため、ろう児一人ひとりの対応の幅が格段に広がり、教職員の対応の課題も多岐にわたっています。連盟では、人工内耳の現状と課題を把握し、連盟としての方向性を示すため、2015年2月、「人工内耳に対する見解を示すプロジェクト」を立ち上げ検討を開始、パブリックコメントを経て、見解をまとめました。プロジェクトの詳細についてはこちらをご覧ください。

下記「人工内耳に対する見解」をPDFでダウンロード

人工内耳に対する見解：論点

一般財団法人全日本ろうあ連盟人工内耳に対する見解を示すプロジェクト

論点① 人工内耳とはどのようなものか。

●人工内耳の技術的な説明

人工内耳は、音声を電気信号に変換し、蝸牛に埋め込まれた電極を通じて脳の言語中枢に伝えて、ことばとして認識させるシステムである。

体内部のインプラントは電極と受信コイルからなり、手術が必要になる。現在は、蝸牛内の構造をできるだけ壊さないような電極を用いて手術が行われている。体外部は、プロセッサと送信コイルからなる。

「手話言語の選択」と
「音声言語の選択」は
対立する選択か？

療育施設
聴覚特別支援学校

全日本ろうあ連盟
「人工内耳に対する見解・論点」

聴覚特別支援学校
(ろう学校)

音声言語主体

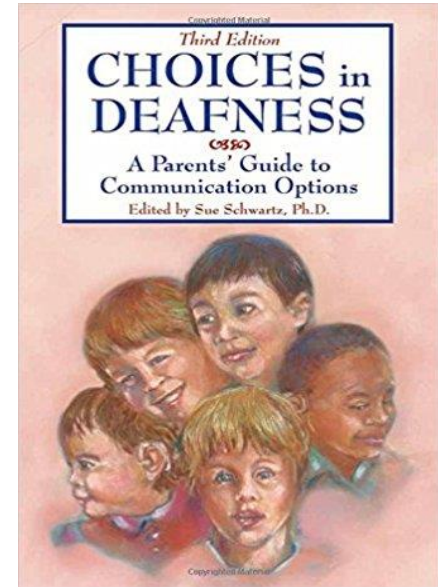
音声言語＋手話言語
(割合は個人によって様々)

手話言語主体

スー・シュバルツの著書

「ろうの中の選択(CHOICES in DEAFNESS)」から

- ✓ 両親がただひとつだけのコミュニケーションモードを選択し、他の方法を選べないように強いてはならない
- ✓ 家庭と支援担当者や教師は良く連携して、聴覚障がい児の言語(手話言語や音声言語あるいはその両方)が、周囲のきこえる友達と同じように発達するように努力しなければならない



共生の精神

ろう児の教育において最も大切なこと
音声言語のみの強制はもちろんいけない。
一方、手話言語のみの強制もいけない。

「手話言語の選択」と「音声言語の選択」は 対立する選択か？

きこえないこともたち、特に聴力がきびしいろう児で、
手話言語のみの場合、手話言語を併用して音声言語を用いた
場合、音声言語のみ用いた場合で、ことばの力を比較する報告
がいくつかなされています。しかし、評価法がばらばらで決定的
な結論はでていません。このような現状で、どちらかに極端に肩
入れをするという態度は好ましくない。

私に関わる九州地区の聴覚特別支援学校・ろう学校において、
音声言語が上手な人工内耳装用のお子さんは
話す相手によって、音声、手話、併用と使い分けています。

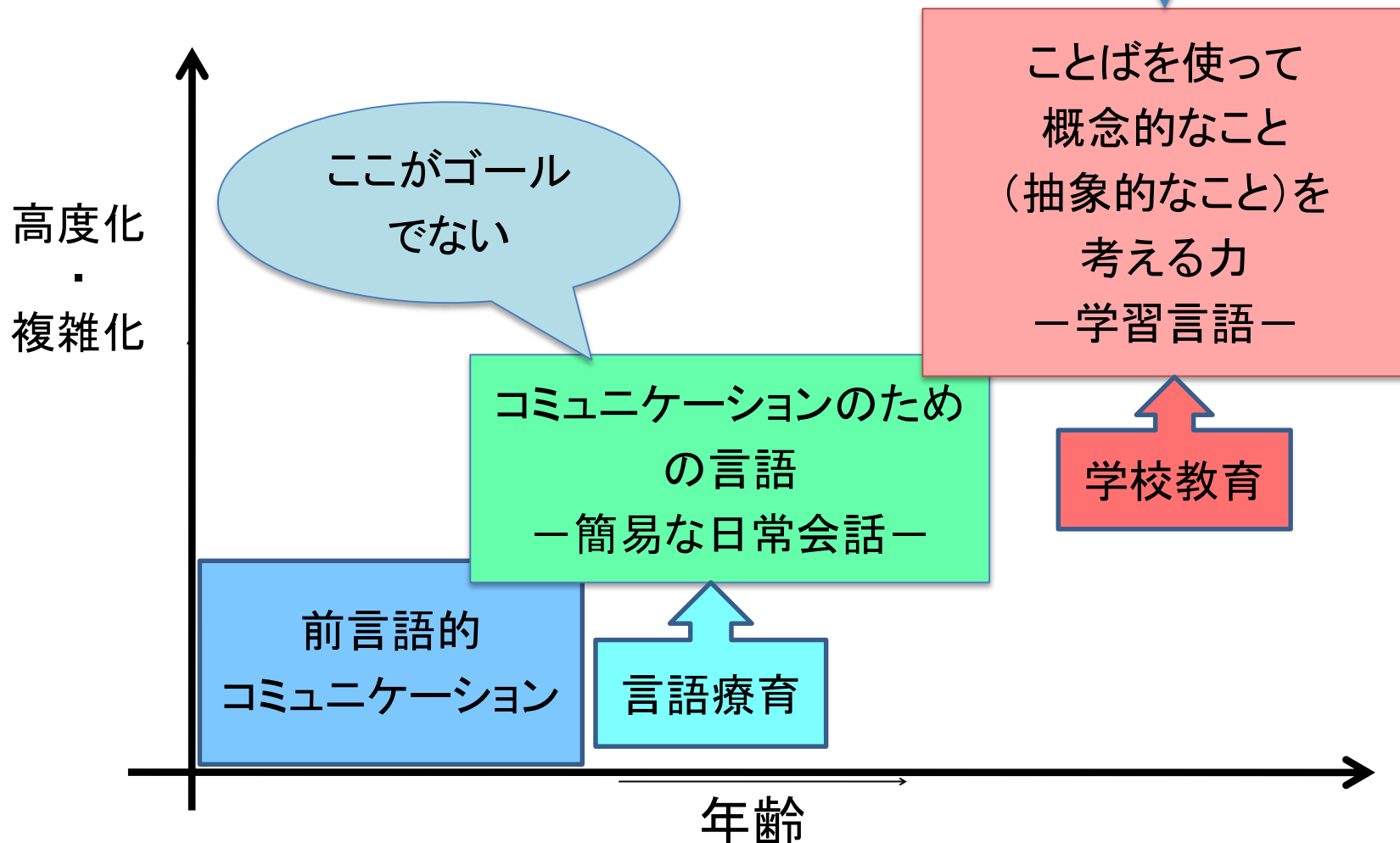
大人が強制しなくても、こどもは柔軟に対応します！

大切なことは

こどもの言語発達を促すことです

- 手段のみに拘泥してはいけません -

ここが目標



現状から考える今後の目標

手話言語法の制定による環境整備を期待

- 音声を主体と選択しても手話が学べる環境
- 成人のろう者と触れ合うことができる手話環境
- 聴者の養育者も理解，安心できる手話社会

ろう社会と音声言語社会の共生を目指す

- 極端に偏らない考え方・行動が大切
- 音声と手話を併用する難聴者への配慮

理想の共生社会の確立には
少数派であるろう者への
一般社会のより一層の理解が不可欠



わたしと小鳥とすずと

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのよう、
地面(じべた)をはやくは走れない。
わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのよう、
たくさんのうたは知らないよ。
すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。



金子 みすゞ

山口県仙崎 出身
(1903年 – 1930年)

日本耳鼻咽喉科学会は
手話言語法の制定を
応援しています



一般社団法人 日本耳鼻咽喉科学会
The Oto-Rhino-Laryngological Society of Japan